

第五回大学院生フォーラム開催に寄せて

馬場 将人(第一回大学院生フォーラム学生実行委員長)



本フォーラムの特徴と魅力

大学院生フォーラムの素晴らしい特徴は、いまだ学生からの注目度が低いことである。これは裏返せば、今なら参加者の競争率が低いということだ。本事業に着目した学生諸君はいいセンスをしている。ぜひこのチャンスをものにしてほしい。それでは本事業の特徴と魅力をおさらいしておこう。

- 本事業は生命環境科学研究科が大学院生のために企画する多国間国際交流イベントで、主要コンテンツは研究発表会、自国の文化を紹介する交流会、エクスカージョンである。優秀な成績を修めた学生は表彰される。
- 本事業を通じて昨今ニーズが高い国際対応力が鍛錬でき、国外や他専攻に多くの知り合いを見つけることもできる。
- 本事業は国を跨って持ち回りで開催され、これまでに日本で二回、中国で二回開催された。参加にかかる費用は支援を受けることが可能。
- 本年度より、本事業には単位が認定される。

私は本事業を長らく見てきたが、第五回フォーラムにおける学生の待遇は破格で、正直驚愕している。さらに本フォーラムに参加した学生の体験記やその後の活躍を見るにつけ、なぜ参加希望者が押し寄せないのか疑問でならない。第五回フォーラムがいかに画期的であるか、以下に述べていくので参加の参考にしてほしい。

本フォーラムの思い出と、第5回大学院生フォーラムに対する思い

第一回フォーラム発起に立ち会った者のほとんどは本学を巣立っていったが、事業自体は完全に軌道に乗り、さらに成長を続けている。プレーヤーの入れ替わりにより事業継続に支障をきたすのではないかという、我々発起メンバーの危惧は杞憂に終わりそうだ。感無量である。

2008年3月、私を含む9名の大学院生と永木正和教授を擁する教員陣は北京へ飛んだ。これは同年10月開催の第一回フォーラムに先立つ顔見せ、学術交流、運営方法の検討を目的とした予行事業であって、本事業



の最初の一步であった。初めて中国を訪問した私の驚きと興奮は、当時の手記からもまざまざと伝わってくる。我々はこの感動をもっと多くの学生に知ってほしいという熱意に後押しされて、その後半年以上に渡り、第一回フォーラムの企画に没頭した。当時はマイっていたはずの、真剣に議論を戦わせたことや、ほとんど寝ずに運営に追われたことが、今では妙に懐かしく思い起こされる。私が本事業をご紹介せずにいられない所以である。



全参加者の高い意識に支えられ、第一回フォーラムはさしたる問題もなく大成功で幕を閉じた。本事業の特徴である専門分野に分かれての研究発表会や、各分科会の学生座長による議事報告、優秀学生の表彰はこの時期に確立されたスタイルである。しかし前例のない事業だけに、企画段階では問題が頻発していた。

第一回フォーラムを終えての手記には、学生、代表者、運営としての課題が多く綴られている。最大の問題としては、意思疎通の難しさが挙げられている。これは国際間に限らず、学生間、学生—大学間といった、普段は気に留めない部分でも表れ、企画の難航を招いた。さらに当時は会計や広報、要旨集編纂までを学生が担当していたため、事業参加と研究活動のバランスにも問題があった。

第二回以降は大学のサポートが充実し、これらは全く問題にならなくなった。個人的には企画体験の機会を多少なりとも残してほしいと思うが、研究と両立しやすくなった現体制は就職を控える修士学生にも配慮されており、学生のニーズに合っていると思う。

最後に事前教育の充実を含む後進の育成が課題として挙げられている。教育面については第四回フォーラムにおいて、白岩善博教授の立案により本格的なサイエンス＝コミュニケーション指導や国際交流カフェCOSMOSとの連携によるコミュニケーション能力強化プログラムが導入されたことで大幅に改善され、その成果も顕著であった。学生の募集については依然として課題だが、本年度より本フォーラムに単位が認定されるようになり、学生からすればかなり参加しやすくなったと思う。

このように本事業は学生の要望に応じて着実に進化してきた。その担い手は変われども、今後も国際的な学生を育む事業として益々発展していくものと信じている。

学生リーダーについて

現存する役職は学生リーダーと分科会の座長のみである。私が参画した当時とは若干異なり、主な役割は当日の司会進行となった。自然と顔を覚えてもらえる立場であり、交流の経験を積むには最適の役職なので、取り合いになっても良いと思う。

本フォーラムの経験はどう活かすか、次世代の学生に向けて

本事業への参加は自分にとって大きな契機となった。学生リーダーという立場にあって、国際的かつ対外的な舞台上でいかに自己主張するかという重要な課題に取り組む良い機会となった。ひとつのイベントを運営した経験は自信に繋がり、何事にも挑戦してみようという気になった。実際、本事業への参加以降、大学間交流や国際交流、海外渡航に対する抵抗感が薄れ、これらへの参加を快く感じるようになった。これは本事業に参加した学生のほとんどが共感するところである。当初、課外活動的な位置づけであった本事業が、現在では大学の教育活動として認定された実績からも、その効果のほどは分かると思う。

少しでも興味を持った学生諸君。まずは参加登録し、大学院生フォーラムの雰囲気を感じてほしい。そして学生ならではの、貴重な経験の種としてほしい。

